

寄稿：教育・研究環境と国際化

大学の改革が叫ばれているが、その鍵を握るものは、第一に教職員が意識を変え、どこまで改革に情熱を傾けるかである。次に重要なことは、学生の個性・獨創性・国際性を育む“教育・研究環境”を学生に提供することである。双方とも当然のことに思われるが、意外と難しい問題を含んでいる。前者においては、未来の大学の理念とビジョンをもち、その実現のための計画を立てる必要があるが、そのために時間と労力を惜しんではならない。また、計画実践段階で的確なリーダーシップと実行力が問われる。後者に関しては、



わが国の大学はその対応に遅れている。ここでいう“教育・研究環境”とは、図書館やコンピュータセンターの充実だけを意味する訳ではない。入学試験から始まり、カリキュラム・教授法・教材・教室・キャンパス運用管理など総合的な環境である。そのような環境が整備されれば、間違いなく学生は意欲的に変わると確信している。学生は授業だけのために大学に通うのではなく、その環境を活かして、自ら設定した問題の解決に挑戦してほしいものである。

教育・研究環境の一つにインターネットの重要性が指摘されているが、インターネットが教育・研究に与えるインパクトは測り知れないほど大きい。最近、外国の大学からの訪問者との話合いで気づくことは、インターネットを介した遠隔討論や共同研究の提案が多く、本格的に大学の教育・研究の“国際化”が始まった感がある。どの大学にも“国際化”のために国際センターが常設されているが、現在の役割は留学生や交換プログラムの面倒をみるくらいで、新しい動きに対応できていない。正に先端情報技術に対応した“国際化”への対処が急務である。

本財団においても、かかる情勢をふまえて“国際化”についてより積極的に取り組む時期にきているように思う。

評議員 相磯 秀夫

(慶應義塾大学大学院 教授
政策・メディア研究科委員長)